

【変わる東京・丸の内 三菱一号館に美術館誕生】(8-8)

1055 語

2010年4月5日

フジサンケイビジネスアイ

NIHKOG

020

日本語

(C) 2010 日本工業新聞社

■街の価値高める「エコオフィス」

環境にやさしい街づくりも「丸の内」の重要なキーワードになっている。環境への配慮は、やむなくするものではなく、街の価値を高め、人々から「選ばれる」ための大切な条件になっている。このため、丸の内の街全体での取り組みはもちろん、それぞれのビル単体で低炭素社会実現を目指したさまざまな対策が進められている。

地球温暖化の原因となる二酸化炭素(CO₂)の排出を抑制するため、新丸の内ビルディングでは、「生グリーン電力」を活用する日本でも初めての取り組みを4月からスタートさせる。

風力や太陽光、バイオマス(生物資源)といった再生可能エネルギーで発電された電力を「グリーン電力」というが、この電力を発電所から直接ビルに引き込み同時同量で利用するのが「生グリーン電力」だ。

通常、オフィスがグリーン電力を使う場合、「グリーン電力証書システム」を活用。グリーン電力の供給元から証書を購入することで「グリーン電力」を使っているとみなす方法をとっているケースが多い。

だが、新丸ビルを所有する三菱地所では、出光興産と提携し、青森県六ヶ所村の風力発電所から、東北電力や東京電力の送電網を経由して直接、「生」のグリーン電力を受電する契約を結んだ。

大手電力会社から電力の供給を受けるよりも割高になるが、CO₂排出量が年間で2万トンも削減できる計算になるという。

また、「知的照明」という試みも始められている。知的照明は人工知能を利用して照明の色合いや明るさを自動的に制御するシステムだ。

東京ビルに入居する三菱電機のオフィスでは、オフィスで働く人たちが仕事をしている際、最適と感じる照度や色合いを個別に設定できるようにした。仕事の能率を上げることを目的としているが、昼間に太陽光を検知して照度を下げたり、席を離れたときに電源を切ったりできる。均一な照度を設定したオフィスに比べ、省エネ効果も高い。同志社大学と共同で実証実験を進めているが、オフィスの快適性と省エネの両方を可能にするシステムとして注目が集まっている。

一方、新丸ビルのオフィスの一角では、省エネ効果が高いLED(発光ダイオード)を利用した知的照明に加え、熱が物体を介さずに高い温度から低い温度に移行する「輻射(ふくしゃ)」現象を応用した空調システムの実証実験も行われるなど、CO₂を極力排出しない次世代のオフィス環境のあり方が模索されている。

明治以来100年を超す歴史を持つ丸の内。赤レンガのオフィス街からスタートし、街に働き、街を訪れる人々のニーズをとらえ、次代の先を読んで進化を続けてきた。ビジネス、ショッピング、文化、そして環境との共生…。さらに100年先を見据え、サステナブルな街づくりが進められている。

文書 NIHKOG0020100404e6450000f